

双月刊行有料宅配誌／編集兼発行人・中村公曾

蒼蒼

第108号

2002年12月10日発行
宅配料2年12号1000円
(小額郵便切手可)

株式会社蒼蒼社／東京都町田市森野2-26-16

『中国の産業力』はしがき

丸川知雄
(東京大学社会科学研究所助教授)

一、中国の産業構造を説明する 三つの理論

中国の産業構造を理解するためには、最低でも三つの理論が必要である。

第一にフェリトマン理論。一九五〇年代に中国は旧ソ連に倣って重工業優先政策を選択したが、旧ソ連の政策の背後にあったのがこの理論である。将来の高い経済水準を実現するためには、開発の初期段階では消費を我慢

して貯蓄率を引き上げ、そうして得た貯蓄を重工業に高い割合で配分しなければならぬ、とする理論である。この理論は、外国貿易のほとんどない閉鎖的な経済を前提としている。その場合に、当面の消費を抑え、生産財を多く生産できるようにしておけば、将来の消費はより多くなる、というのは見やすい道理である。中国は五〇年代から七〇年代末まで消費を切りつめて重工業への投資に回してきた。本書第一章でみるように、中国が今や世界一の鉄鋼生産国になることができたのは、過去に貧しい生活に耐えて投資をしてきた蓄積のおかげという側面がある。中国の石油化学産業(第二章)、工作機械産業(第四章)など、発展途上国にしては重厚長大産業が充実しているのも、過去の重工業優先政策の結果である。と同時に、その時代には設備の老朽化と余剰人員の負担に苦しみ、政府から借金を棒引きされてもなかなか再生できない状況にあるのも事実である。過去の重工業優先政策は大きな遺産とともに多大な負債も残した。

第二の理論は、比較優位論である。中国は人口の多さから来る労働力の豊富さに優位

性を持っていることは明らかであるが、そうした優位性を生かして貿易をして外貨を稼ごうという発想は一九七〇年代までは余りなかった。八〇年代半ば頃から、中国政府は人民元を次第に切り下げ、同時に日本、香港、台湾などからの企業進出に門戸を開いたことによって、それまで眠っていた中国の比較優位性が大きく花開くこととなり、衣服、玩具、電子製品などの労働集約的製品の輸出生産拠点が中国に作られるようになった。こうした動きはその後、生鮮野菜や加工食品からテレビや白物家電、パソコンやコピー機など様々な産業に展開し、さまざまな分野で中国は「世界の工場」となった。中国が日本、アジアNIEs、ASEANの後を追って発展していくという、いわゆる「雁行形態論」(注1)(本書序論の図表9などはまさにその例である)も比較優位論の派生系である。

第三の理論は、産業集積論である。特定の地域に一つの産業が集まることによって、関連産業が成長したり、人材が集まったり、企業間の多様な分業関係が作られるなどして、その産業の競争力がますます強くなる、という現象に着目するのがこの理論である。

一九八〇年代における中国の輸出生産拠点
は、材料や部品をほとんど輸入し、中国では
安い労働力を利用して単純な組立作業だけ
を行って製品を輸出するというものが多
かった。だが、輸出向け生産の規模が大き
く、資本集約的な材料や部品なども外
国で作って中国に持ってこられるより、中国で
作った方が輸送コストや規模の経済性の面
から有利だということになってくる。さら
に、輸出向け工場で技術を身につけた人材
が自分で会社を興したり、現地で生産され
るようになった材料や部品を利用して中国
国内向けの生産を行う企業なども輩出する。
こうして関連産業の発展と人材の集中はま
ずまずその地域のメリットを高め、新たな
外国企業も進出してくる。広東省の珠江デ
ルタ地域の経済発展は、一九八〇年代は比
較優位論だけで説明できたが、今は電話交
換機やチップ部品などハイテク産業も立地
し、単純に比較優位だけでは説明できなく
なっており、産業集積論の観点を導入する
必要がある。他にも、浙江省におけるさま
ざまな軽工業や機械産業の発展、北京の中関
村におけるIT産業など産業集積論で説明
すべき現象は数々見られる。今後の中国の

経済発展を引っ張っていくのはまさにこうし
た産業集積の力なのではないかと思われる。

二、中国産業における新旧交代

いま日本で注目されているのは、主に比
較優位論で捉えられるような中国である。
こうした側面から見た場合、中国は数々の
製品において世界一の輸出量を誇り（本書
序論）、さらに産業集積論で言われるような
集積のメリットも加わって、まさに「世界の
工場」へ向けて躍進中であるように見える。
一方、中国の役人や学者の目の主たる関
心は、いまだに重厚長大産業の中国の方
に注がれている。中国の人たちにとって、中
国を代表する企業といえば、中国第一汽車
集団公司であり、鞍山鋼鉄公司である。両者
は中国の自動車産業と鉄鋼業を代表する企
業だが、日本や韓国の同業種の企業に遥か
に見劣りがし、多額の借金の棒引きなど政
府の手厚い保護政策に守られて何とか生き
延びているというのが現状である。中国政
府の産業政策における主たる関心事は、そ
うした国際競争力のない重厚長大産業を
どうやって競争力あるものとするかという

ことにあり、いまでも重工業優先政策の名
残をとどめているといえる。中国政府は鉄
鋼業、石油、石油化学産業、自動車産業など
は決して外国資本に委ねることなく、何と
か旧来の国有企業を再編して強力な民族系
企業を作りたいという姿勢をとっている
（本書第1章、第2章、第5章）。そのために
国有企業をグループ化して統合しようとい
う試みが執拗に繰り返されている。だが、古
い設備、債務、余剰人員の塊のような企業を
寄せ集めたところで、競争力のない大企業
ができるにすぎず、この政策は成功しない
だろう。こうした姿を見ると中国の現状は
「世界の工場」とは程遠い。中国の人々から
みれば、日本のマヌコミが「中国の世界の工
場」だと言いたてて警戒感を煽るのは、日本
と中国との格差を維持しておきたいがため
の陰謀だとさえ見えてしまうのである。

そうした行き違いを避けるためにも、中
国の産業の三側面を視野におさめる必要が
ある。フェリトマン理論の中国は「古い中
国」であり、比較優位論の中国と産業集積論
の中国は「新しい中国」で、いま日本は「新
しい中国」にだけ注目していればよい、とい
うような見方もあるが、これには賛成でき

ない。輸出生産拠点や産業集積が拡大する
につれ、そこから生ずる鉄鋼や石油化学原
料に対する需要が重厚長大産業を活性化
する、というように、「古い中国」は「新し
い中国」とは無関係ではなく、「新しい中国」
からの刺激によって蘇る可能性もあるから
である。「新しい中国」が「古い中国」を侵
食、解体、再利用する過程が今後しばらく続
き、それが終わる頃には中国の産業力は他
のアジア諸国には例をみない水準に達する
可能性がある。「新しい中国」だけでなく、
「新しい中国」と「古い中国」の新旧交代の
ドラマこそ、これからの中国の産業発展に
おける注目点である。

本書で取り上げる九業種のいずれにおい
てもそうした新旧交代のドラマが観察され
る。本書では各産業の歴史を踏まえつつ、最
新の動向、とりわけ二〇〇一年二月のWT
TO加盟以降の動向を報告することに重点
を置いた。業種によって新旧交代の進度は
さまざまに異なるが、いずれの業種におい
ても歴史の厚みと近年の変化の激しさを感じ
てもらえるだろう。

なお、本書の末尾に「資料編」を設けた。
資料編では、本編のなかの各論で取り上げ

た産業につき、世界の中での中国の実力を
測るためのデータを提供している。産業の
特性によって若干の例外はあるが、（一）市
場規模と成長率、（二）技術力、（三）輸出競
争力、（四）有力企業存在、の四つの項目
について、指標となりうるさまざまなソ
ーから集めた。これらのデータを眺めるだ
けでも、現在中国の各産業が世界の中で置
かれてある位置がおのずから浮かび上が
ってくるだろう。

（注一）アジア各国が雁の群のように日本を
先頭にして順に発展していく、というのが
「雁行形態論」だと日本でもアジアでも理解
されているが、「雁行形態論」を最初に提唱
した赤松要の議論はそのようなものではな
かった。最近、中国のキヤッチアップが急
で、「雁行形態を乱している」という議論が
なされることも多いが、赤松が戦前に書い
た論文では、先進国に「同質化」しようとす
る後発国と、技術革新によって後発国との
「異質化」を図ろうとする先進国とのせめぎ
合いとして世界経済をとらえており、「雁の
群」は絶えず乱れるものとしてとらえられ
ていたのである。

『中国の産業力』より抜粋

中国的なるものを考える

アジア的生産様式 論争物語断片 その3 秋沢修二について(続)

福本勝清
(明治大学教授)

前回、秋沢修二の評価についてとりあげてみた。秋沢は、戦前、アジア的生産様式論的な視角から中国社会の停滞論的性格を主張した人物としてよく知られている。その際、かならずといってよいほど、呂振羽『中国社会史諸問題』(一九四二年)における秋沢批判の部分がとりあげられ、アジア的停滞から中国を克服するものこそ、皇軍(日本軍)の中国統治であると秋沢が、支那社会構成『(一九三九年、白揚社)序文で述べた部分]が、よく引用される。ただ、秋沢自身は、一九三〇年代のソ連の論争の影響を受け、アジア的生産様式概念については否定的な

立場をとっており、かならずしもアジア的生産様式論「アジア的停滞論ではないことに注意しなければならぬ。蛇足ながら、付け加えれば、赤松啓介、東洋古代民族史(一九三九年、白揚社)もまた、独自の社会構成としてのアジア的生産様式概念を否定している。同書は、古典古代的奴隷制に対する、東洋における「家内奴隷制」固有奴隷制を基礎とする奴隷所有者的構成」がアジア的生産様式であり、それが中世にはアジア的封建制となつたコヴァレフの見解の影響下にある。一九三〇年代後半の主流的見解とは以上のようなものであった。

では、秋沢修二自身は、先の批判についてどのように言っているのだろうか。秋沢は、戦後、静岡大学教授(一九七四年退官)となるが、政治的には社会主義協会に属していた。筆者は、一九八〇年前後、ちょうど埼玉県川口市に住んでいた頃、街頭で受け取つたある市民集会の呼びかけのビラに、集会呼びかけの賛同者の名前に秋沢修二の名前をみつけてひどく驚いたことがあった。呂振羽に批判されたはずの秋沢修二がまだ生きていた。とても、不思議な気持ちがあったことを覚えている。秋沢は戦後も著作を出し

続けているが、中国に関してはまだ書いているが、中国に閉じてはまともったのは書いていないようである。

昨年、インターネットで古本屋を検索し始めた頃、『秋沢修二論述集』創作的マルクス主義の道(一九八七年、スクラム社)を見つけた。さっそく購入した。帯(こしまき)には、「ロシア革命七十周年に贈る」とあり、また、「戦前の反宗教闘争を担い、戦後日本の変革へ思想的営為を重ねてきた著者の主要論述集」と書かれている。同書の第二章「戦前の思想・運動史を語る」に、早稲田(哲学科)入学以来、三木哲学にかぶれ、唯物論研究会を経て歴史研究を始めるいきさつや、その後の一九三〇年代末までの秋沢の学問の遍歴が、やや詳しく述べられている。

さて、「支那社会構成」について、秋沢は次のように言っている。「…中国の奴隷制社会はあんがい長く続いた。そしてウクライナ(経済制度)としてはずっと長く続いて後代まで残った。社会経済構成としての奴隷制は、漢代に終わったが、ウクライナとしては長く残り、異民族が侵略してくると、また奴隷制が復活したと私は指摘した」。中国社会は、マルクスが『経済学批判』のなかで述べたような、奴隷制、封建制、近代資本主義

といった前進的継起的な発展をとげていない。王朝が倒れるとその倒したものがまたタイラントになるといふことを繰り返す。これを『アジアの停滞』と呼んだわけだ。

ずいぶん弛緩した文章だなと思う。最初のパラグラフはいいとしても、後のパラグラフは、緊張感を欠いているばかりでなく、論点のすりかえをやっている。いまさらマルクス云々は読者には興味がないかもしれないが、行論の関係上、指摘せざるをえないのだが、マルクス『経済学批判』序言(『経済学批判』ではない)で述べられている経済的、近代ブルジョア的生産様式であり、秋沢が言うような、奴隷制、封建制、近代資本主義、ではない。奴隷制、封建制、近代資本主義的という並びから連想させられるのは、スターリン『弁証法的唯物論と史的唯物論』(一九三八年)において、歴史上存在した生産関係の基本的な型としてあげられた、原始共同体的、奴隷制的、封建的、資本主義的、社会主義的の発展図式である。どこでもいいじゃないかと言われそうだが、論争の当事者や歴史理論に関心をもっている人が、両者(『経済学批判』序言と『弁証法的唯物

論と史的唯物論)を混同するなどといったことは考えられない。さらにもう一つ、問題となった「アジアの停滞」とは、単に繰り返すタイラントやデスポットが現れるということではなく、むしろ、それ(デスポティズム)の起源が、人口灌漑および中央政府の経済機能や、(より根底低く)家長制や農村共同体的長期にわたる残存に帰せられているという点にあった。つまり、秋沢の停滞論が(秋沢が否定したはずの)アジア的生産様式論的な視角に依拠していたこと、それゆえに、そのような停滞の克服は、インドや中国のようなアジア的停滞を特徴とする社会とは根本的に性格を異にする日本によって成就されなければならない、といった論法がとられたところに、『支那社会構成』の問題があったのである。

秋沢は、上記に続いて以下のように述べている。「ところが戦争が終ると、中国から反撃がきた。この本の中で呂振羽という中国の歴史家を批判した。呂振羽氏は周の時代に封建制になった中国社会は、ヨーロッパより、より先進的に発展したと言っている。これを批判したわけだ。奴隷制があったということは何も恥づかしいことでは

はないのだが、そういう問題に価値判断をからませて歴史研究をやる、呂振羽氏もそういう一人だと思える。戦後になって、呂振羽氏が『秋沢はヨーロッパ帝国主義の侵略を弁護するものだ』というようなことを言ってきた。そういうことと学問的な研究とは別である。なにも古くから開けていたからと言って、ギリシャのようにその後停滞してしまつた国もあれば、ロシアのような後進国で最初の社会主義国となるといった例もある。世界史のなかにはそんな例はいくつもころがっているわけである」。

ここでも論点のすりかえがある。呂振羽の秋沢批判の主眼は、ヨーロッパ帝国主義のアジア侵略、中国侵略の擁護ではない。そうではなく、日本の中国侵略の擁護に對してであった。また秋沢は、呂振羽の周代封建制論(この場合の封建制とは、生産様式や経済社会構成としての封建制)を批判し、周代「奴隷制論を対置したので、それに対し呂振羽から学問的な批判ではなく、イデオロギッシュな批判を浴びただだと弁解しているが、これも論点をずらしているといわざるをえない。

秋沢は、呂振羽の批判に対し「中国社会の

特性」という反論を書いたとある。この反論をまだ読んでいないので、というよりどこに掲載されたのかもわからないので、入手できないのだが、最終的な結論を出すのはまだ早いかもしれないが、本書によるかぎり、秋沢の弁解は、まともな弁解になっていないように思う。自己の著作(支那社会構成)ばかりか、関連する他の著作についても、ほとんど読みなおさず、年々へることに自分に都合のよい記憶だけしか残らなくなった、その記憶だけをたよりに書いたとしかいいようがないものである。秋沢は、全然反省していないばかりか、むしろ、居直っているように見える。どうしてだろうか。

たぶん、秋沢には皇軍云々の部分「幸いにして、今次の日支事変は、支那社会に一つの光明を与える結果となった。すなわち皇軍の武力が、支那社会の『アジア的』停滞性の政治的支柱とも云うべき軍閥支配を、支那の広汎主要地域から一掃してしまつたのである」は「支那社会構成」の本文ではなく、序文に書いたものであり、それゆえ、序文を理由に批判するのは、納得できないという思いがあつたのではないだろうか。

序文ではやむをえず時局に合わせた「奴隷の言葉」を使わざるをえなかつたが、本文はまづとな社会科学論文だ、というわけである。それが本当かどうかを知る手立てはいまいる自分のアトリエのなかだけでは十分を得ることができない。そのかわり、手元にある秋沢修二『労働の理念』(一九四二年白揚社)を瞥見してみることにする。一九三九年と一九四二年では、状況の重たさがいぶん異なるので、単純に比較できないが、実は『労働の理念』においても、「支那社会のアジア的性格」について論じられており(第四部『アジア的性格と日本の全体主義』)かつアジア的生産様式概念の批判、および戦前のアジア的生産様式論を代表するウイットフォーゲル批判まで繰り広げられている。そして、日本精神によつて、「一方ではアジアの停滞を止揚するとともに、他方においてはヨーロッパの矛盾を止揚しなければならぬ。新しい日本文化は、世界文化であり、その精神は科学的精神と合一した日本精神である」と、はっきりと述べている(もちろん本文で)。そして、この日本精神は皇道(東亜の全体主義)に統一されるのである。

知識人が全面的に屈服せざるをえなかつたこの時期の著作をとりあげるのには、いささか安易かもしれない。だとしたら、秋沢は、自分が後に『労働の理念』を書かざるをえなかつたという事情を踏まえて、諸家の『支那社会構成』批判に答えるべきであつた。そうすれば、論点のすりかえや弛緩した弁解とは別のことが書けたかもしれない、と考える。

美野久志/西忠雄共著

中国市場開放プログラム

A5判二七二頁 定価二四〇〇円+税

二〇一〇年まで、実際には二〇〇六年までに中国市場は大きく開放される。

その開放プログラムはWTO加盟文書として世界に公約されている。

日本のビジネスマンに開かれた巨大市場の可能性を分析・予測する。

一目にしてナットクできる「解説 図版」見開き対照のページ構成。

巻末には経済産業省作成の「WTO加盟文書」をコンパクトに纏める。

逆耳順耳

矢吹 晋

誤報の連打

あるジャーナリストから次のようなメールをいただいた。「先生ご指摘の通り、日本メディアは誤報の連打で歴史的惨敗でした。」「例拳します。(1) 江総書記統投へ、(2) 朱首相も留任、(3) 軍事委主席胡氏以外に委譲、(4) 次期国家主席に李鵬氏、(5) 温副首相が辞意、(6) 曾慶紅氏、常務委入りせず、(7) 政治局、減員へ、などと、いった具合です。党大会に絡む人事報道で、これほど日本メディアが大誤報を連打し、歴史的惨敗に終わったのは、珍しい事です。」

これらの「連打誤報」のうち、いくつかは私も見ており、それについて私見を述べた私のメールへの返信メールである。上記のように並べてみると、なるほどこれは、たいへんだ。北京報道はほとんど末期症状ではないかという気がする(むしろ誤報を書かなかつた記者がいることも私は知っています)。

中国共産党の情報公開が不足していること、極端な秘密主義を守っており、自由な取材を許さないといった客観的制約条件は十

分斟酌しなければならぬまい。とはいえ、正確な情報を流したメディアもあるから、話は面白くなる。このジャーナリストが教えてくれたところによると、「常務委員九人の序列まで当てた米国のインターネット新聞」がある。ナヌナヌ?というわけで、このインターネット新聞をさかのぼって調べて見る。

「多維新聞網」だ。十月二六日、多維網は「吳官正」中央紀律検査委員会書記「説を流した。紀律検査委員会書記は重要ポストであり、当然常務委員になる。十月三〇日、賈慶林「常務委員昇格」説を流した。十月三一日、吳邦国「全人代委員長」説を流した。全人代委員長は当然常務委員でなければならぬ。このように、際立った昇格人事をさみだれ式に流して注意を喚起したあと、決定打を流したのは、党大会の開会前日のことだ。十一月七日、常務委員九名を特定し、その序列まで解説した。驚くなかれ、その序列は完璧なものであった。常務委員および政治局委員を決定する中央委員会が開かれたのは十一月一五日前であるから、多維網は一週間以上前に、「選挙結果」を入手していたわけだ。ただし、ヒラの政治局委員についての下馬評は、あまり当たっていない。これは意図的な作為ではないかと思われる。肝心な九名を序列まで含めて完璧に当てたのは、むしろ「内部情報」を得たものに違い

反省か開き直りか

『東京新聞』十一月二八日付に中国総局鈴木孝昌支局長の書いた「記者の日・中国の変化慎重に見極め」と題したコラムが掲載された。これはなんとも不可解な奇文である。過日の党大会で胡錦濤が総書記に選ばれたことについてつぎのように書いている。

「一時、総書記統投を狙っていたが江沢民氏(76)は党務を退き、故鄧小平と同様に軍のトップとして陰の最高実力者にとどまる道を選んだ。私は八月一七日付朝刊で「江総書記統投」と報じ、その後も党大会直前まで、江氏統投の感触を持ち続けた。」

この記者に限らず、一部の日本特派員は党大会人事をめぐって、「大誤報の連打」ともいうべき醜態を演じた。その最たるものが「江沢民総書記統投論」である。私自身は二

年前に書いた『中国の権力システム』ポ
スト江沢民のパワーゲーム(二〇〇二年十
月刊、一〇、一六、三六ページなど)で江沢
民が総書記ポストを胡錦濤に譲ることを既
定の実事として書いた。以後、一貫してこの
見方を書き、語ってきた(最近のものは『中
国から日本が見える』ウエイツ社 二〇〇二
年十月)。

「江沢民総書記続投説」なるものが、そも
そも一〇〇%あり得ない話であることは、
チャイナウオッチャーの最も初歩的な常識
であるとは考えてきた。したがって鈴木
記者たちがとつてもない憶測を書き続ける
のを知りほども恐いものはないとただあきれ
ていた。今回の記事によって、その確信がい
よいよ深められた。鈴木記者の場合、「党大
会直前まで、江沢民の感触を持ち続けた」
由であるから、その「感触」センスが相当に
犯されていることは明らかである。かくて
「反省を踏まえ、そうした流れを検証する」
と称したコラムが書かれることになったが、
このコラムには「反省」のかけらもなく、「流
れを検証する」と称して、この記者が正体不
明の情報屋に一貫してマインドコントロール
された経緯を臆面もなく書いている。

けたあと依然として、この記者を支配し
ているようだ。なんとも奇怪な話である。
「十五の月は翌十六日に最も輝く」とい
う小説が党大会前に流行した。これは十五
回党大会で総書記三選を果たした江沢民が
「十六回党大会で続投してさらに輝く」と
の暗喩として語られたと記者は、根拠を説
明する。この種のコトバ遊びを中国人が好
むことはむろん承知しているが、これを十
五回党大会、十六回党大会にひっかけた場
合にどこまであてはまるかは、よほど慎重
にその適用範囲を見極めなければならぬ。
その眼力こそがジャーナリストの真骨頂な
のだ。この記者はなぜたあいもない十六夜
説を信ずることになったのか。
「いわく、江沢民の親族も、引退などま
つた
く考えていない」と、私に漏らしていた。
「おやおやこれはいへんなニュースソ
ースではないか。江沢民の親族」とはどんな人
物か。江沢民とはどのような血縁関係にある
人物か。その人物は中国語で語ったのか日
本語で語ったのか、それがまず問題である。
そのような重要人物が一介の日本記者に
「秘密を漏らす」などといったことがそもそ
もありうるだろうか。到底信じられない話
だ。もしそのように「親族」が現れ、「秘密」
なるものを語るのなら、それは「江沢民の親
族」を名乗るベテンスの仕業に違いないと
判断するのが常識というものだ。

かつて「騙子」という題のベテンスの「報
告文学」「紀実小説」が大きな話題になっ
たことがある。類似のベテンスの話は枚挙に
いとまがないほどだ。人口が日本の十倍の
中国にはベテンスの数も日本の十倍いてお
かしくはないし、量が質を変えるという法
則に従えば、中国のベテンスの手管は、日本
よりもはるかに高度な水準まで成熟してい
ると予想しておくべきである。
さて鈴木記者は続ける。「江沢民の留任作戦
は、人気の高い朱鎔基首相を抱き込み、不評
の李鵬・全国人民代表大會常務委員長を外
すことだった」。秋以降、江沢民の全面引退
説を流し、「私をやめさせるなら、あなた
も一緒だ」と圧力をかけた。「首相を十年も
務めた実力者の李鵬を江沢民は敵に回してし
まった」。

したがって江沢民が李鵬を敵に回したこ
とが続投失敗の原因であったとするような
見方は、到底検証にたえない俗説なのだ。
「江沢民周辺では大会直前まで総書記続投を
軸とした新指導部リストが存在、今回、最高
指導部入りした江沢民の腹心までもが、最後
まで続投説を唱えていた」と、「江沢民周辺」
なるものは、どのあたりを指
すかがきわめてアマイである。従来にも
増して人事について厳しい箝口令が敷かれ
た今回の場合、「続投説を軸とした新指導部
リスト」なるものに、果たしてアプローチし
えたのかどうかきわめて疑わしい。アプ
ローチできたのは、おそらくカセネタの類
であるはず。真実のリストを隠蔽するため
の陽動作戦にまんまと騙されたのだ。ここ
で「江沢民の腹心」とは、おそらく曾慶紅を指
すものと思われるが、曾慶紅が江沢民を持
ち上げる目的は曾慶紅自身を持ち上げるた
めであるのは、見易い道理である。
また、総書記を胡錦濤氏に譲るが、江沢
民はその上の 党主席 に君臨する案まで浮
上した。「党主席制復活案」は、確かに一時、
伝えられたことがある。しかし党主席制を
やめて総書記制に改めたのは鄧小平の決断
である以上、鄧小平路線に乗る現行指導部
にとってそのような変更ができないことは
容易に予想されたことだ。

情報に踏み込み過ぎて、世代交代という大
きな流れを見失った」と弁解している。この
弁解ははなはだ歯切れが悪い。情報屋のカ
セネタに振り回されて、江沢民続投なる当
初からありえないシナリオを信じ込まされ
ただけの話だ。世代交代の流れについてい
えば、二〇〇二年六月中旬に地方レベルの
党大会で書記・省長の平均年齢が六十歳未
満に若返りした時点で、従来からの若返り
路線は再確認されていた。
「国内外の世論が人事の流れに影響を与え
たように思う」、「新華社通信が江沢民の退任
を英文で速報したことは、海外の視線を十
分に意識していたことを物語っている」
鈴木記者はここで、「内外の世論」や「海
外の視線」を意識して、江沢民が続投を断念
したかのような書き方をしているが、おそ
らくそうではない。政治局の七十歳定年制
は、およそ十年前から固まってきた慣行であ
り、五年前にこの基準に依拠して高石が引
退したあたりから明確に慣行化している。
五年前に高石をこの基準で引退させた江沢
民が今回この基準でみずから縛ることに
なる事実は、五年前から想定されていた。私
自身はそれを根拠として、一貫して江沢民
引退という観測を公言してきた次第である。
ただし、私は江沢民は軍事委員会主席をも
含めて完全引退するのがスジであると書いて
きたが、これは江沢民の居残り作戦に

よって裏切られた。私は江沢民がここで引
き際を誤ったと解釈している。この問題に
ついては改めて論じたい。
「北京発大誤報」資料一覧
第一号「産経新聞」伊藤正特派員発
二〇〇二年二月十日付
国家主席に李鵬氏浮上、中国次期体制、
権力の集中排除、軍事委主席 江沢留
任正当化狙う
【北京九日「伊藤正」】中国共産党は、今秋開
く第十六回全国大会後の中央委員会第一回
総会で、胡錦濤政治局常務委員(五九)を新
総書記に選出するが、胡氏は、江沢民総書記
(七五)が兼任してきた国家主席と中央軍事
委主席には就かない見通しになった。軍事
委主席は江沢民が留任、次期国家主席候補に
は李鵬全国人民代表大會(全人代)常務委員
長(七三)が浮上している。党内事情に通じ
た中国筋が九日までに明らかにした。中
筋によると、これは中央書記局の党大会準
備作業グループが打ち出した人事・組織構
想とされ、既に内部討議が始まっている。
党、国家、軍の権力を総書記に集中、他の中
枢ポストも政治局常務委員が独占する現体
制をやめ、常務委員でなくとも主要ポスト

「後継」胡氏に疑心暗鬼

中国・江総書記続投へ

【北京一日鈴木孝昌】中国共産党が五年ぶりに行う指導部交代人事を協議していた「北戴河会議」が十六日までにはほぼ終了し、江沢民国家主席が党のトップ（共産党総書記）と軍のトップ（軍事委員会主席）を続投する見通しとなった。信頼できる複数の中国筋と西側外交筋が同日、本紙に明らかにした。江主席は引退を希望し朱鎔基首相にも留任を強く要請、朱首相も基本的に受け入れた。七六歳の江氏、七三歳の朱氏が留任することで、共産党の世代交代は先送りされることになる。今回の人事では、党、軍、国家の三権を握る江沢民氏が権力を移譲し、十三年ぶりのトップ交代が実現する。江氏が最高権力者の地位を維持する。ただ、江氏と朱氏は五年の任期を満了せず途中交代する可能性が高い。複数の有力筋の一致した情報によると、ポスト江沢民の有力候補とされた胡錦濤国家副主席は、象徴的水戸である国家主席（国家元首）だけを譲り受ける。また、次期首相候補とされる温家宝副首相は、第一（常務）副首相にとどまる。江氏、朱氏の留任意向を受けて、党内ナンバリングの李鵬・全国人民代表大会（国会）に相当する常務委員長も留任に向けた動きを活発化している。李氏の処遇は結論が出ておらず、調整が続いている。江主席の側近、曾慶



党の社
和

表向きは『安定優先』

世界が注目する今秋の中国共産党第十六回党大会での指導部人事は、江沢民氏と胡錦濤書記を続投し、十三年間に及び、江沢民体制をさらに

『安定優先』

延長する可能性が強まった。故鄧小平氏が十年前に指名した後継者、胡錦濤氏（胡）のトップ交代は、まだ見送られる見通しだ。自ら提起した「十七次党大会」を覆してまで留任にこだわった江氏の事情は、

核心

と、当局系研究機関が最近相次いで中国共産党の「十七次党大会」の国とどう懸念が二つと、

腹心・曾氏へ時間稼ぎ

指導者交代「危険な歴史」

一般的には、江氏は鄧小平氏に例にならざる軍のトップ、中央軍事委員

か、江氏を支持する軍の腹心とみられていた。鄧小平氏が軍事委員長として党の上を君臨してきたのは、

現在では、すべてが江主席の思い通りに政治体制ではない。だが、党の長老や幹部を見送って人物はいない。なぜなら、江氏自身が長老だから、ある中国当局者がつややい。

中国共産党 主な指導者人事
1945 毛沢東 党主席に就任
66 文化大革命始まる
66 鄧小平・国家主席が失脚
71 林彪・党副主席クーデター未遂
76 毛沢東、周恩来が死去
76 華国鋒が党主席就任
81 鄧小平が中央軍委主席就任
82 党主席制を廃止
82 胡耀邦が総書記に就任
87 趙紫陽が総書記に就任
89 天安門事件
89 江沢民が総書記に就任
93 鄧小平が軍事委員長退任、江沢民に
93 江沢民 国家主席を兼任
97 鄧小平が死去

▽危険な立場
過去、党指導者は、後継者を好む（曲折）。毛沢東主席は鄧小平、林彪の両後継者を自ら送り去り、最後は党内基盤の強い華国鋒氏に「君なら安心」と託した。その華氏を打倒した鄧氏も、胡耀邦、趙紫陽の両氏を失脚させ、当時中委には無名だった江沢民氏を選んだ。歴史を見れば、筆頭候補者に指名された胡錦濤氏は、極めて危険な立場にある。

紅・党中央組織部長の政治局常務委員（最高指導部）入りは難しい情勢だ。江主席は今年初めから朱鎔基首相を巻き込んだ江主席の姿勢を強め、「政権移行期の安定確保」と、次世代指導者が成熟していないことを理由に、留任に向けた世論形成を進めていた。北戴河会議は、七月末から共産党上層部が河北省の同地で開催。人事の骨格を固めた。最新の結論は持ち越した。今秋に開かれる第十六回共産党大会後の党中央委員全体会議で正式決定される。党大会の日程は未定だが、十一月の開催が有力だ。

第五号『東京新聞』
二〇〇二年八月二日付
(左ページの切抜き参照)

胡耀邦の息子と五力条の誓文
三月のある日、外務省が招聘した「中国共産党中央統一戦線部副部長胡德平一行」との昼食会に招かれて懇談した。折よく前夜に友人から「中華工商時報」(三月二日号)に掲載された「誠信問答」胡德平インタビューを読んでいた。早速その話題を持ち出したところ、アダム・スミスは「国富論」の著者として知られているが、「道徳情操論」も書いている、と切り出した。「経済

学は不道徳である」とか、「不道徳の経済学」といつた言い方は間違いだなどと、自説を少し述べ、ところで日本の学者の意見を聞きたいと、相手の顔をのぞきこむ作風は楊中美(「胡耀邦」の著者)あたりから聞かされていた印象と寸分も違わない。実にいい感じであり、高級幹部のいやらしさは微塵も無い。私は牛肉や鶏肉の偽装問題が日本に蔓延することを指摘しつつ、これも中国の専横特許というよりは、日本もひどく汚染されていることを指摘しつつ、これこそ市場経済の敵である、と応じたが、胡德平氏が明治維新の精神として語る内容が面白いのだが、気になったので調べてみた。

―― 広く会議ヲ興シ万機公論ニ決スベシ。
―― 上下心ヲ一ニシテ盛ニ経綸ヲ行フベシ。
―― 官武一途庶民ニ至ル迄各其志ヲ遂ゲ人心ヲシテ倦マザラシメテ事ヲ要ス。
―― 旧來ノ陋習ヲ破リ天地ノ公道ニ基クベシ。
―― 智識ヲ世界ニ求メ大ニ皇基ヲ振起スベシ。

我が国未曾有ノ変革ヲ為ントシ、朕躬ヲ以テ衆ニ先シ、天地神明ニ誓ヒ、大ニ斯國是ヲ定メ、万民保全ノ道ヲ立ントス。衆亦此旨趣ニ基キ協心努力セヨ。

―― 各々其志を遂げ、人心をして倦まざら

↑ 2002年8月22日付『東京新聞』

しめんことを要す。この中国語訳が市場経済の精神に合うと解釈しているらしい。計画経済システムのもとで自由意志を奪われるのではなく、各々その志を遂げる。そうすれば、確かに人心が倦むことはなく、人々は前向きに生きる意欲をもつであろう。その担い手になるのが中国の企業家たちである。これが胡徳平ミッシヨンの立場であったようだ。

謝伯陽／五四年二月生まれ、四八歳、全国工業連合会副主席、全人代代表。

金会慶／五六年十一月生まれ四五歳、合肥の二三連職業技術学院院長、ハイテクの民間大学を創立した人物、渋谷に七名の事務所をもつ。全人代代表。

馬建國／六二年十月生まれ四〇歳、中銀企業服務公司董事長。

林智敏女史／五六年四月生まれ四五歳、中華海外連誼会副秘書長。この組織は出版助成をやり二九二冊出版した。

許智明／政協委員、香港に会社をもち、日本会社の吸収、すなわちM&Aに意欲を燃やす。ダイキンと取引あり。

これらやる気十分の企業家たちを引き連れて胡耀邦の息子は東京、沖縄、長崎、福岡を旅行した。全国工業連合会は「わが民間企業家組織の中核であるから、」三つの代表」の申し子」に近く存在するといふが、その精神は「利と義」に込められている。すなわち

りばりカネを儲けて、「義」すなわち貧困支援のために「利」を「使」う。その深利精神はまさに明治維新当時の企業家もかくありなれと思われたことであつた。

不可解な小泉シンガポール演説の訳語

小泉首相はシンガポールで「包括的経済連携協定」を結び、日本のアジア政策を英語で演説した由だが、それはこう説明されている。

「日本の基本的考え方を概要以下のとおり披露し、各国首脳的支持を得た。また一四日には、シンガポールにおいて、政策スビーチとして表明した。福田スビーチに基づきASEAN重視政策を継承しつつ、情勢の変化に対し、率直なパートナー」として、共に歩み共に進む協力を推進すること。」

共に歩み共に進む」とはなんのことか。「歩み」と「進む」とは、ほとんど同義ではないか？ なせ繰り返す必要があるのか。そこで英文を調べる。

Speech by Prime Minister of Japan, Junichiro Koizumi, Japan and ASEAN in East Asia / A Singapore and Open Partnership - January 14, 2002
Singapore
Singapore is called the "Lion City." Maybe it

has something to do with my hairstyle, but in Japan I am known as the "Lion Prime Minister." Perhaps that is why I am so delighted to be here in the Lion City.

このあたりの「コマーシャル」がどの程度受けたかはさておき、肝腎の英語は Our goal should be the creation of a "community that acts together and advances together."

それならば「なせ」共に行動し、共に進む」と訳さないのであらうか。act, action という能動的な行為を、なせ単に「歩む」と曖昧に訳すのか。その理由がまるで分からない。外向けには「行動すること」を約束し、国民には「実はあれは空手形だ」と弁解しているのであらうか。なんとも不可解である。

近藤義雄（近藤公認会計士事務所）著

中国進出企業O&A

【設立・運営・税務・会計】

A5判 二五六頁 定価 二四〇〇円＋税

会社の設立から運営、会計と税務の知識なるポイントを解説。素朴な100の疑問に、O&Aの形式でやさしく回答。進出を目指す者にも、既に進出した者にも座右の書。一冊。